分科会1「コロナ禍の下での博物館の取組」に参加して

箱根町立森のふれあい館　小野　譲史

はじめに

第68回全国博物館大会2日目に主会場の横浜市開港記念会館に近いニュースパーク（日本新聞博物館）で分科会1「コロナ禍の下での博物館の取組」が開催された。この分科会では、各博物館が新型コロナウイルス感染症の影響により休館した際にどのような活動が行われたのか、また緊急事態宣言解除・開館後には、コロナ発生以前と比べて展示や活動がどのように変わったのか、博物館の現場の取り組み事例について4名の演者から報告があり、議論が交わされた。コーディネーターは伊藤寿茂氏（新江ノ島水族館）に務めていただいた。本分科会の内容を感想を交えつつ報告させていただく。

報告1「コロナ下における体験型展示・教育普及プログラムの展開」髙尾戸美氏（多摩六都科学館）

はじめに高尾氏から、多摩六都科学館が臨時休館後、再開館に向けた新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の取り組みや課題についてご報告していただいた。

臨時休館後の開館に向けた準備では、データに基づいた管理により、展示アイテム116点について、フィジカルディスタンスの確保、消毒可能な展示物かどうか、自身で感染予防対策が困難な未就学児対象の展示物などを検討して休止の有無を決定した。他にも、人気の体験展示「ムーンウォーカー」については整理券発行して待機可能人数を制限するという対応をとり、同館の強みであったいつ来ても気軽に観察・実験・工作が体験できる「ラボ」という場では、濃厚接触に該当するため休止し、無人の企画展コーナーに変更した。

特別企画展ついては、体験展示を多く取り入れた企画であったため中止も検討したというが、人数制限、利用年齢制限、入替制ルールの対策を設けて開催した。人数制限をしたことで、来館者1人1人が丁寧に展示に向き合える時間が増えて良かった一方で、メインターゲットとなる親子連れの未就学児などが年齢制限で一緒に体験できず、期待に寄り添えなかった等の課題もあったという。科学講座など対面でのプログラムでは、3密を避けるための一部内容の変更や安全対策について丁寧に説明することを務めた結果、これまで以上に参加者の満足度の上がった評価をいただけたという。安全配慮義務をしっかりと果たし、来館者の不安を解消することは大切だと改めて実感した事例であった。

館内消毒は、展示解説スタッフが1日3～5回程度実施し、閉館後は学芸系のスタッフも協力して行ったという。消毒によって本来業務に割ける時間が減少してしまうと課題を挙げていた。これは同館に限らず、他の多くの施設での共通の課題のように感じた。

対面でのプログラム実施を模索する一方で、オンラインでの講演会、実験ショー、自然観察会のライブ中継といった活動も同館では行ってきた。今後もオンラインを活用したプログラムの提供は需要があり、開館と平行して行うにしても、以前まで行っていた対面プログラムと同様の人員と時間が割かれてしまうため、その位置付けについては疑問が残る。そこで高尾氏は、有償化の可能性も検討していく必要があると考えているという。現在、無料で視聴できるコンテンツが増えている中で、お金を支払ってでも見たいと思えるようなものを製作していくことができるかどうかが課題である。

報告2「千葉市動物公園における取り組み」三森典彰氏（㈱ BiotopGuild）

三森氏が代表を務めるBiotopGuildは、千葉市動物園での子ども動物園ふれあい事業（一部の動物の飼育展示）、動物科学館（教育普及）、総合案内の運営業務を受託している。新型コロナウイルス感染症拡大による動物園の休園・再開園後の取り組みや問題点等をメリットとデメリットに分けてご紹介いただいた。

動物園が休園になったことで、受託しているいくつかの対面でのイベントや解説業務を中止した。代替措置としてオンラインイベントの充実や代わりの掲示物等を図ったが、リアルに開催するネイチャーガイドのイベント1時間よりも、1時

間分の動画を撮影や編集など作成する方が苦労は多く、人的にも金銭的にも負担が増してしまったという。

本報告では、このようなコロナ禍のマイナス面を払拭するオンライン事業のプラス面について、我々働く側の視点に立って下記の5つメリットに分けて紹介した。①動画や写真をこまめ情報発信することで、日々の動物観察の気づきや記録することが増える ②来園しただけでは注目を浴びにくかった動物たちや園内の情報について興味をもってもらえるようになる ③バックヤード内の活動などのスタッフの仕事ぶりや動物たちへの姿勢自体がコンテンツとなり、スタッフ自身が“見られている”という意識を強くもつことができる ④リアルの展示では、園内への掲示物にどれくらい来館者が興味をもつのか把握は難しいが、SNSやYouTubeではいいね数やコメント、視聴者数があり反応がわかりやすい ⑤SNSやYouTubeのコメントで、ポジティブなものはモチベーションが上がり、ネガティブなコメントはアドバイスと捉え、展示や掲示の改良のヒントとなる。

NEW NORML = 新たな日常の下での博物館活動の中でオンライン事業は中心になりつつある。しかし、一方通行の情報伝達になりがちで、参加者同士の横のつながりが生まれない、ネット環境の有無で参加者限られてしまうなどデメリットもあり、対面ならではの良さがあることは事実である。オンラインイベントで得た情報を活用する楽しみと、その実物を見る・感じるといった施設を訪れる楽しみを併用して使い分けていくことが理想的であると感じた。

報告3「博物館は新型コロナウイルスの何を伝えるか-関連資料の収集・保存・活用-」森原明廣氏（山梨県立博物館）

森原氏は、新型コロナウイルス感染症拡大による山梨県立博物館での取り組み・対応の紹介に加えて、新型コロナウイルス関連資料の収集とその意義についてご紹介いただいた。

同館は、全国的にも比較的早い段階で新型コロナウイルス関連資料の収集を始めた。収集の発端になった「スペイン風邪」の調査では、公的な出版物、記録はあるものの社会・世間で、何が起きていたのか、人々がどのような動きをしていたかなどの資料が同館27万点の所蔵資料の中でほとんどないことに直面した。これを契機に、新型コロナウイルス関連の広告・チラシ、マスク関係の資料などの収集を館独自に始めたという。生活に密着した感染症の流行は不幸せな出来事であるため、1日も早く「忘れたい」という人々の意識が働き、関連の資料や情報は風化しやすく、重要視されてこなかったと森原氏は話した。同館が収集した資料は、館独自で集めてきたもので、県民などからの収集は募っていないという。その理由として、“事件は今起きる”のであり、関連資料の中には今利用すべき大事なお知らせまでが提供されてしまう可能性があるからである。今後、収束の方向に向えば、一般の方にも資料提供を呼びかけるとしている。こういった博物館施設と民間団体・個人の取り組みの調整や、全国的な取り組みとしての組織化、役割分担、資料分類基準等の整備を今後の課題として挙げた。

事態が良くなると、明るかった過去を思い出して忘れようとするという森原氏の言葉にあったように、実際、政府配布の布マスクについて効果があったのか、などの議論はほとんどないまま過ぎ去ってしまったように思える。忘れ去った記憶を思い出すという意味では、まず資料が残っていないと議論もできない。将来のために資料を適切に整理し、保存、そして発信していくことは重要である。

報告4「地域と美術館の新たなつながり　世田谷美術館の場合」橋本善八氏（世田谷美術館）

橋本氏からは、世田谷美術館での新型コロナウイルス感染症拡大による臨時休館時の取り組みや課題、変化ついてご紹介いただいた。

世田谷美術館の収蔵品は約1.6万点あり、世田谷区ゆかりの作家や素朴派の作品が柱になっている美術館である。同館でも新型コロナウイルス感染症拡大の影響で臨時休館になり、事業計画の見直しを迫られた。特に困った問題の一つが、海外の作品を借用する企画展だったという。相手国の状況の情報を収集するのに苦労し、国によっては輸送費が3～4倍に跳ね上がることもあり、延期や中止等どのように対処するかが問題となったそうだ。

見直しの中で新たに組んだ事業計画の一つとして、異彩を放ったのが7～8月に行われた「作品のない展示室」だ。一切作品を置かずに、建物そ

のものや窓から見える公園の夏景色を楽しんでもらうということをコンセプトに無料で実施した結果、1.6万人の来館者が訪れたという。この企画は、来館者の流動シミュレーションの分析にも利用された。

同館では地域連携として「美術館鑑賞教室」を年間1万人の小・中学校の生徒に行っていたが、コロナ禍で休止となり、それを支える鑑賞ボランティア登録者の活躍の場もなくなってしまったという。博物館活動を支える友の会も、企画展の延期・中止により特典がなくなり、入っているメリットがなく会員が減少するという。会員向けのオンライン講演会やワークショップを行っているものの、歯止めが効かないようだ。

これは世田谷美術館だけではなく、他でも同じような課題を抱えている博物館があるのではないか。博物館における友の会やボランティアは博物館活動を支え、地域社会と博物館を繋げる上で重要な役割を担っている。一時的な取り組みでしのぎ切るのではなく、持続可能なポスト・コロナ時代に合った運営方法を検討していかなればならないと危機感を抱いた。

コロナ禍によって、博物館の社会的使命や役割が改めて問われている現在、世田谷美術館の大胆かつ画期的な「作品のない展示室」の試みは、多くの反響があり、今後の博物館のあり方について再確認する機会を提供したと思われる。ポスト・コロナ時代では、同館の報告であったような柔軟な発想と臨機応変な対応が博物館施設を運営する上で重要になるのだと強く実感した。

おわりに

ご報告いただいた各館園での取り組みは、コーディネーターの伊藤氏のコメントにもあったが、コロナ禍でのマイナス面を払拭する努力が多くあり、プラスに転じさせる工夫が感じられた。いずれもポスト・コロナ時代に適応した新しい博物館のあり方についての実践例の紹介であり、先行きのみえない不安の中、希望となるものであった。また、博物館の存在意義・社会的役割についても考えさせられる良い機会になった。学芸員になってまだ日の浅い私にとって、今後の取り組みや考え方について参考にできる点も多く、自館での取り組みに生かしていきたいと感じた。

最後に、本分科会でご報告いただいた4名の演者の皆さま・コーディネーターを務めていただいた伊藤寿茂氏、ならびに本大会の参加に際してご支援いただいた神奈川県博物館協会事務局の皆さまに感謝申し上げる。